教員養成学部で学ぶ学生に求められるべき能力についての考察
―文教大学教育学部生の強さと弱さの分析から―

千葉　聡子*

A Study on Reguired Abilities for the Teacher Training Department's Students:An Analysis of Strengths and Weaknesses in Bunkyo University Students of Faculty of Education

Akiko CHIBA

要旨　本稿の目的は，文教大学教育学部学校教育課程の学生を対象として行った調査を分析し，彼らの入学以前を含んだ学習，生活の様子や学習観を明らかにすることと，結果をもとに今後の大学教育のありかたを考察することにある．調査票はBenesse教育研究開発センターが行った調査とほぼ同じ内容になっており，分析はBenesse調査との比較が中心になる．比較の結果，文教大学教育学部学校教育課程学生の特徴として明らかになったことは，第一に，文教生は教員になるという目的を明確にもって大学に入学してきており，目的の明確さはBenesse調査の学生と比較しても際立っていること，第二に「サークルや部活動」,「学校行事やイベント」,「社会活動」,「アルバイト」の4つの活動を活発に行っており，相対的に「大学の授業」,「大学の勉強以外の自主的な勉強」や「読書」が低い状況であること，第三に大学入学後に身についた割合が高い領域は「積極的態度」の領域である，ということであった．この他の結果も含めた調査結果をもとに，明確な目的をもって大学に入学する学生が今後身につけなければいけない能力について考察した．
キーワード：教員養成　調査票調査　使える知識　大学の理念　文教大学教育学部生

1．目的と方法

(1) 目的

本稿は，文教大学教育学部学校教育課程の学生を対象に行った調査票調査のデータをもとに，教育学部学校教育課程の学生の特徴を把握するとともに，教員養成学部の学生の教育のあり方について考察することを目的としている．このような目的を設定した理由は，以下の２点にある．

文教大学教育学部は教員養成を主たる目的として教育を行っている．すなわち，教育学部を構成する二つの課程の一方である学校教育課程の学生の全てが，また心理教育課程の学生も多くが，教育職，保育職に就くための資格取得に必要な単位取得を大学での学習目的の一つとして学習している．また，教育学部の学生の大多数が単に資格取得を目指すだけではなく，実際に教員として教壇に立つ道を選び実現させている．このような特色をもつ学生を「教員志望」という枠内で捉えることにとどまるのではなく，より客観的なデータをもとに把握し，踏み込んで理解することが必要であると考えるからである．この点に目的設定の第一の理由がある．

第二に，少子化と大学の増加による大学全入化が進み，大学の学生獲得競争という事態が生じる中，それぞれの大学は大学の特色を明確にし，在学期間中に何を学ぶことができるかを具体的に示すことが求められつつある．こうした中，本学教育学部は，私立大学では最初に小学校教員養成を行った大学として特徴的な歴史を有してい

*ちば　あきこ　文教大学教育学部教職課程

る．また現在，小学校を中心に高い教員就職率を保っており，2011年発行の受験生向けの大学紹介誌において，国公立大学，私立大学を含めた全大学中，小学校教員採用者数では第4位，中学校教員採用者数では第6位と紹介されている（朝日新聞社版教育・ジュニア編集部内「大学」編集室　2011：188–9）．特に小学校教員については私立大学で1位という形で，大学で学んだ結果についての具体的な情報提供に成功しているが，このことが一体どのような影響を学生にもたらしているのか．この点について考える必要があると考える．

以上の点に本稿の目的を設定した．それではこれから調査の分析を進めていこう．

(2) 調査について

本稿では，文教大学教育学部学校教育課程の2009年度及び2010年度の1年生と3年生を対象として行った『高校生活と大学生活の連結についての調査[1)]』（以下文教大調査と記す）の分析をもとに考察を進めていく．本稿の目的の一つは先にも記したように，本学教育学部学校教育課程の学生の特徴を把握することにあるため，本調査の調査票は他大学との比較が可能となるように設計した．具体的には，一部を除き，Benesse教育研究開発センターが2008年10月に大学1年生から4年生を対象に行った『大学生の学習・生活実態調査　2008年調査[2)]』（以下ベネッセ調査と記す）と同様の調査項目を設け質問した．文教大調査と比較するデータはこのベネッセ調査のデータになる．なお，文教大調査の対象者等は以下の通りである．

①調査対象と回答者

調査対象は2009年度学校教育課程1年生，3年生及び，2010年度学校教育課程1年生，3年生である．2009年度1年生，2010年度は悉皆調査（在籍者数は2010年4月において2009年度1年生に該当する者297名，2010年度1年生261名，3年生272名）として行った．2009年度3年生は200名に配布した（2009年度3年生の在籍者は259名であるので配布者は在籍者の77.2％になる）．有効回答数は2009年度調査1年生は109名（有効回答率36.7％），3年生67名（有効回答率33.5％）で，合計176名，2010年度調査，1年生181名（有効回答率69.3％），3年生148名（有効回答率54.4％），合計329名であり，2年間を合わせると1年生290名，3年生215名で合計は505名であった．

②調査方法と時期

調査方法は調査票による調査であり，2009年度は2010年1月に実施，2010年度は2010年7，10，11月に実施した．授業時間を利用して調査票を配布し，授業終了時，あるいは回収ボックス等により回収した．

③回答者の基本属性

文教大学調査の回答者の属性は表1，2で示した通りであり，男子が母集団に比べ8ポイント少なく，数学専修の学生も約8ポイント少ないが，母集団の状況を反映できるサンプルを得たと考えたい．

④調査データを読む際の注意点

調査対象について，ベネッセ調査は大学1年生

表1　文教大学調査回答者および母集団の性別と学年（％）

	性　別		学　年	
	男　子	女　子	1年生	3年生
回答者	45.7	54.3	57.4	42.6
母集団	53.9	46.1	51.4	48.6

表2　文教大学調査回答者および母集団の所属専修（％）

	専　修								
	国　語	社　会	数　学	理　科	音　楽	美　術	体　育	家　庭	特別支援
回答者	15.4	20.0	11.8	6.4	7.8	3.8	17.4	7.6	9.8
母集団	17.2	19.2	19.7	6.6	5.8	3.1	15.2	5.1	8.1

から4年生までの全学年が含まれるが，文教大学調査には2年生，4年生が対象として入っていない．対象学年が文教大調査とベネッセ調査では異なるため，全体等で比較する際には注意が必要になるが，基本的に学年の効果が予想される質問項目については，全体同士での比較は避けるようにした．なお文教大学1年生，3年生は2009年度と2010年度の2年間の学生で構成される（同じ学生が2年度に渡って回答することはない）．分析では2009年度と2010年度の学生を合わせて1年生，3年生として扱う．

また今回の調査の対象は教育学部二課程のうち学校教育課程の学生のみであり，心理教育課程の学生は含まれていない．学校教育課程学生は，小学校教諭1種免許，及び中学校教諭2種免許あるいは特別支援学校教諭1種免許取得のための単位修得が卒業要件となっており，入学時にすでに教員免許取得を決定して大学に進学してきているという特性をもっているが，心理教育課程の場合は教員免許を取得しないことが可能である．このため，今回の調査は対象者を学校教育課程の学生に限定し，教員免許取得を前提とした学生ということを第一の属性特徴として分析を進めていくこととした．

2. 大学受験までの生活

(1) 高校生活時の様子

それでは，文教大調査とベネッセ調査の比較から，本学教育学部学校教育課程の学生（以下文教生と記す）の特徴を把握してみよう．なおベネッセ調査との比較は，ベネッセ調査の全体，及びベネッセ調査の教育系学生との比較が中心となる．

まず，文教生の出身高校についてみると（表3参照），公立学校が68.9％（ベネッセ調査全体62.6％，ベネッセ調査教育系79.7％），私立学校が29.5％（ベネッセ調査全体34.8％，ベネッセ調査教育系16.8％），国立が1.0％（ベネッセ調査全体1.9％，ベネッセ調査教育系3.5％）で公立学校出身者が3分の2を占めている．また学科は普通科がほとんどで92.2％（ベネッセ調査全体88.4％，ベネッセ調査教育系95.8％）であり，浪人経験者は12.7％（ベネッセ調査全体17.7％，ベネッセ調査教育系14.7％）であった．ベネッセ調査の全体及び教育系学生の出身高校と比べると傾向に大きな違いはないが，ベネッセ調査教育系は全体と比較すると公立，普通科が多く，文教生の場合もその傾向はあるものの，ベネッセ調査教育系よりは比率が低くなっている．

また，調査では卒業した高校では卒業後どの

表3　卒業した高校（％）

		文教生	ベネッセ全体	ベネッセ教育系
設置者	公　立	68.9	62.6	79.7
	私　立	29.5	34.8	16.8
	国　立	1.0	1.9	3.5
	その他	0.6	0.7	0.0
学　科	普通科	92.2	88.4	95.8
	総合学科	2.1	2.1	2.1
	専門学科	3.2	7.0	2.1
	その他	2.5	2.6	0.0
タイプ	国公立・難関私大	42.8	42.8	56.6
	中堅レベル大学	48.8	43.9	36.4
	短大，専修・専門学校	6.2	7.5	4.2
	就職，就職希望者	2.2	5.8	2.8

ような進路を選ぶ人が多いかについて，「国公立大学や難関私立大学への進学者が多い」，「中堅レベルの大学への進学者が多い」，「短大や専修・専門学校への進学者が多い」，「就職や就職希望者が多い」の４つのタイプをあげて選択してもらった．文教生の数字を順に示すと，42.8％，48.8％，6.2％，2.2％で，「国公立・難関私大タイプ」と「中堅レベル大タイプ」がそれぞれおおよそ半数ずつであった．ベネッセ調査の結果は表の通りであるが，教育系と比較すると文教生は「国公立・難関私大タイプ」が13.8ポイント少なく，「中堅レベル大ダイプ」が12.4ポイント多い．この質問への回答は主観的判断によるものである点に注意する必要はあるが，教育系の学生の約６割がいわゆる難関大学への進学を目指す生徒が多い高校出身者であるのに対し，文教生は４割である点には注目する必要がある．

さらに調査では卒業した高校の特徴について，「校則が自由な学校だった」，「学校行事では生徒が率先して行っていた」，「家庭学習や授業の予復習について，学校で厳しく指導されていた」，「卒業後の進路選択について，学校からの積極的な勧めがあった」の４つ質問をし，５段階で評価してもらった．「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を足した結果を文教生，ベネッセ調査全体，ベネッセ調査教育系の順で示すと，「校則が自由な学校だった」は44.0％，46.4％，54.6％，「学校行事では生徒が率先して行っていた」は82.9％，67.7％，78.4％，「家庭学習や授業の予復習について，学校で厳しく指導されていた」は40.0％，36.2％，44.1％，「卒業後の進路選択について，学校からの積極的な勧めがあった」は58.7％，51.9％，60.2％であった．ベネッセ調査の結果から教育系の学生の特徴をみると，大学生全般との比較では教育系の学生は比較的自由な校風の中で学校生活に主体的に関わる一方，教師からの指導も比較的多く受ける形で生活していることがわかる．この様子を教育系学生の学校へのコミットメントの強さと読み取れば，この学校へのコミットメントの強さが教育系統の学部への進学を促したと考えることもできる．しかし，後に示すように教員志望の度合いが非常に強い文教生はこの４つの質問では特徴を見せておらず，解釈が難しい側面がある．

ここまでの結果から，文教生の過ごしてきた高校については，ベネッセ調査の対象者と大きく異なるものではないと考えられる．

(2) 大学入試について

それでは次に，どのような大学入試を経て現在の大学に進学したかをたずねた結果をみてみよう．ベネッセ調査と比較すると，文教生の場合は一般入試が最も多いものの，推薦入試の比率が高いことがわかる（表４参照）．なおベネッセ調査には国公立大学の学生が含まれていることに注意する必要がある．

表４　現在の大学・学部の受験方法（％）

	文教生	ベネッセ全体	ベネッセ教育系
一般入試	58.7	56.4	60.1
センター入試	4.4	11.9	12.6
附属高校推薦	5.6	4.0	2.8
推薦入試	30.2	20.1	15.4
その他	0.8	7.6	9.1

また大学受験対策として取り組んだことを複数回答可能でたずねた結果をみると（表５参照），文教生の場合「センター試験に対応した教科学習」が75.0％で最も多く，次に多かったのが「私立大学に対応した教科学習」で58.8％であった．また，「小論文の準備」，「志望理由書・自己推薦書作成」，「面接の準備」がベネッセ調査に比べ多く，文教生に推薦入試を経て入学した者が多いことが反映された結果といえよう．また「実技（体育・美術・音楽・デザインなど）」に取り組んできた学生が全体の４分の１を占めることも本学の特徴といえそうである．なお，大学受験対策として取り組んだこととして教科学習については「センター試験」，「国公立二次試験」，「私立大学入試」の３つ選択肢が用意されているが，文教生でこの３つの選択肢のいずれも選択しなかった者が17％

表5　大学受験対策として取り組んだこと（%）

	文教生	ベネッセ全体	ベネッセ教育系
センター試験に対応した教科学習	75.0	66.8	83.2
国公立二次試験に対応した教科学習	30.0	39.0	54.5
私立大学入試に対応した教科学習	58.8	43.8	19.6
小論文の準備	50.4	26.5	30.8
志望理由書・自己推薦書作成	33.6	21.1	17.5
面接の準備	47.2	25.7	23.8
プレゼンテーション・ディスカッション	2.4	2.1	2.1
実技（体育・美術・音楽・デザインなど）	24.8	1.9	10.5
その他	0.6	4.7	4.2

いる．

また，受験の追い込み時に平日，学校の授業以外に1日どのくらい勉強したかをたずねた結果（現役時）をみると，文教生は5.6時間，ベネッセ調査全体は4.5時間，ベネッセ調査教育系は4.9時間で受験期の勉強時間がベネッセ調査全体と比べ約1時間，また教育系と比べても0.7時間長い．しかし，高校1，2年生の平日の学校の授業以外の勉強時間は「ほとんどしなかった」が37.2%で，ベネッセ調査全体の同質問回答者の29.9%，ベネッセ調査教育系の21.7%に比べかなり高く，受験の追い込み期の勉強時間が長いことが目立つ．さらに，高校生活で「勉強」，「部活動」，「友だちとの交流」，「アルバイト」についてどのくらい力を入れたかを全体が10割になるようにたずねた質問では，文教生は「勉強」が2.5割であったのに対し，ベネッセ調査全体では3.6割，ベネッセ調査教育系では3.7割であったこと（文教生は「部活動」が4.4割で最も高いがベネッセ調査はどちらも勉強が一番高い）から，受験の追い込み時の勉強時間に多さについては，勉強が習慣化した結果とはいえそうにもない．これらのデータだけで解釈すると，文教生は短期集中型，めりはり型の勉強をしており，高校での勉強を受験と結び付けて考える傾向があるといえそうである．

(3) 大学に求めるもの

次に表6「受験する大学，学部を決める際に重視したこと（複数回答可）」の結果をみてみよう．表6は文教生が選択した割合が多いものから順に並んでおり，全体，教育系の数値の後にある丸印で囲った数字はそれぞれのグループ内での順位を示す．文教生に特徴的な点を示すと，「とりたい資格や免許が取得できること」の87.1%が最も多く，大部分の学生がこの項目を選択している．この87.1%はベネッセ調査と比較して，全体とは67.3ポイント，教育系とも26.3ポイント多い．また3位の「就職状況がよいこと」も教育系と比べて30ポイント近く多く，順位は9位も上になっている．文教大学教育学部学校教育課程の受験の決定は，卒業の就職を考慮した上での資格取得の要素が非常に強い．この点は文教生の特徴とみてよいだろう．

また他に文教生が他大学と比較して多いのは「先生のすすめ」の29.0%であり，逆に少ないのは「世間的に大学名が知られていること」（全体と比較して約20ポイント，教育系とでは約10ポイント少ない）と「経済的な負担が少ないこと」（全体と比較して約10ポイント，教育系とでは約25ポイント少ない）であった．「先生のすすめ」が他大学の学生と比べて多く，「世間的な知名度」が約1割ということは，本学教育学部のこれまでの実績について，教育界においてはかなり認知されているが，逆にその認識が外に広がっていないと考えられる．また，文教生の特徴として「先生のすすめ」が多かったのに対して，先に示した「卒業後の進路選択について，学校からの積極的な勧

表6　受験する大学，学部を決める際に重視した点（%）

	文教生	ベネッセ全体	ベネッセ教育系
①とりたい資格や免許が取得できること	87.1	19.8⑩	60.8②
②興味のある学問分野があること	77.3	64.8①	69.9①
③就職状況がよいこと	43.7	22.7⑦	13.3⑫
④入試難易度が自分に合っていること	41.2	48.1②	45.5③
⑤自宅から通えること	35.4	33.2③	30.8⑤
⑥先生のすすめ	29.0	15.9⑪	15.4⑪
⑦キャンパスの雰囲気がよいこと	26.5	23.9⑥	22.4⑦
⑧入試方式が自分に合っていること	23.3	30.7④	29.4⑥
⑨キャンパスライフが楽しそうなこと	22.7	19.9⑨	21.7⑨
⑩親のすすめ	14.9	14.0⑬	18.2⑩
⑪世間的に大学名が知られていること	10.9	30.1⑤	22.4⑦
⑫経済的な負担が少ないこと	10.3	22.6⑧	35.0④
⑬合格が早く決まること	7.8	8.7⑭	7.0⑭
⑭試験日や試験会場が多く，受験しやすいこと	6.8	6.9⑯	7.0⑭
⑮親元を離れられること	5.6	7.8⑮	7.7⑬
⑯先輩のすすめ	5.2	1.7⑱	0.7⑰
⑰都会にあること	4.6	15.5⑫	6.3⑯
⑱上記に当てはまるものはない	0.2	3.4⑰	0.0⑱

参考）○で示した数字は順位

表7　現在の大学・学部に進学したときの気持ち（%）

	文教生	ベネッセ全体	ベネッセ教育系
ぜひ入りたいと思って進学した	52.2	32.4	47.6
まあ満足して進学した	36.7	45.7	32.9
やや不満足だが進学した	8.0	13.7	10.5
やむを得ず進学した	3.2	8.3	9.1

めがあった」の回答は，ベネッセ調査と大きく異ならなかったことには矛盾があるように考えられる．この点については，後で述べるようにかなり明確に教師になることを決意している多くの文教生にとって，つまり将来の職業に対して相対的に迷いが少ない文教生にとって，高校教師はいわゆる進路相談の相手としてではなく，受験大学の決定のための具体的な情報の提供者として意味をもっていたと解釈できるのではないか．

次に「現在の大学・学部に進学したときの気持ち」についてであるが，文教生は「ぜひ入りたいと思って進学した」が52.2%と半数以上で，「まあ満足して進学した」と合わせると88.9%と9割近い学生が満足して進学していることがわかる．この質問に対して，ベネッセ調査教育系は47.6%（合計80.5%），ベネッセ調査全体は32.4%（合計78.1%）と両者とも高い値となっているが，ベネッセ調査の結果に比べ文教生は10ポイント近く多いことには注目する必要がある．この入学時の満足度の高さを説明する要因としては，文教大学生の入学目的が明確であり，同時に本学への進学によって4年後の目的達成の可能性が高まったと判断していることが考えられる．

この点と関連して，大学卒業後の進路につい

てたずねた結果をみておこう．まず大学卒業後の進路希望をみると，文教生は「教員」が 86.8％であるの対して，ベネッセ調査教育系では 55.0％であり，同じ教育系と比べて「教員」志望が 30 ポイント多い．また大学卒業後の進路を考え始めた時期について，文教生は「中学生以前」が 31.4％．「高校 1・2 年生頃」が 34.2％で，合計すると 65.6％となりおよそ 3 分の 2 の学生が高校 2 年生までに将来の職業について考え始めている．ベネッセ調査の「中学生以前」と「高校 1・2 年生頃」を合わせた結果は全体で 20.9％．教育系が 43.5％であり，文教生がかなり早い時期から進路について考えていることがわかる．

また現在の進路の検討状況について，文教生の 1 年生，3 年生でみてみると，「希望進路の実現に向けて準備・活動中である」がそれぞれ 70.9％，81.5％，「現在検討中」が 24.9％，15.2％，「まだ何も考えていない」が 2.8％．0％であった．ベネッセ調査の全体での 1 年生，3 年生の場合「希望進路の実現に向けて準備・活動中である」がそれぞれ 20.0％，60.8％，「現在検討中」が 41.6％，28.6％，「まだ何も考えていない」が 36.6％，6.0％であった．文教生とベネッセ調査の数値差はかなり大きく，特に文教生の場合は 7 割の学生が 1 年生から希望実現のための活動を開始していることは注目に値する．この状況についての解釈はいくつか可能であるが，学習動機が明確な学生が入学しており，いわゆる「何となく進学した」「みんなが行くから大学に行く」といった学生とは異なるタイプの若者が，文教大学教育学部では学んでいると考えるのがまず妥当であろう．しかし，別の言い方をすれば，大学において新たに学習目的を発見する必要はなく，予想していた事柄を学び，すでに設定した目的を達成することに文教生の関心の中心があるとも理解できる．

以上の結果から，大学入学以前の文教生の特徴の一つとして，将来の進路を早い段階から考え始めており，その進路の実現を可能にする大学という点で大学選択がされていることがあげられる．この点についてはこれまでも本学教育学部の学生の特徴として指摘されてきたことであるが，調査データをもとにある程度客観的に確認することができた．また，出身高校については「国公立大学や難関私立大学への進学者が多い」高校と「中堅レベルの大学への進学者が多い」高校がおよそ半数ずつであるが，若干「中堅レベルの大学への進学者が多い」高校からの学生が多く，ベネッセ調査教育系の学生が「国公立大学や難関私立大学への進学者が多い」高校の出身者が比較的多かった点と異なっていた．

3. 大学生活

(1) 大学生活の様子

それでは，文教大学教育学部学校教育課程の学生はどのような大学生活を送っているのであろうか．表 8 は，大学での時間をどのように過ごしているか，全体が 10 になるように答えてもらった結果である．

ここでは学年ごとの状況を示したが，最も多いのはベネッセ調査と同じで「授業などへの出席」であり，1 年生，3 年生ともに 5.6 割であっ

表8　大学で過ごす時間の割合（割）

	文教1年	文教3年	ベネッセ全体1年	ベネッセ全体3年
授業などへの出席	5.6	5.6	6.2	6.0
図書館や研究室などでの自習	0.5	0.9	0.8	1.2
大学構内でのサークルや部活動	2.0	1.6	1.1	1.0
友人との会話や交流など	1.8	1.6	1.6	1.5
その他	0.2	0.3	0.3	0.3

表9　生活の様子

	文教1年	文教3年	ベネッセ全体1年	ベネッセ全体3年
1週間のうち大学に通う日数（単位：日）	5.6	5.2	5.0	4.5
1週間のうち大学で過ごす時間（単位：時間）	36.0	32.0	29.1	24.3
運動系サークル・部活動に現在参加（単位：%）	68.0	51.9	28.2	25.1
文化系サークル・部活動に現在参加（単位：%）	32.7	23.0	37.4	24.6
1週間を通してのサークル･部活動時間(単位:時間)	7.6	8.5	6.3	7.5
現在アルバイトしている（%）	75.7	86.4	58.6	65.5
1週間を通してのアルバイト時間（単位：時間）	11.3	14.0	13.2	13.8

表10　大学生活で力を入れてきたこと（「とても力を入れた」+「まあ力を入れた」）（%）

	文教3年	ベネッセ全体3年
①アルバイト	72.4	53.9③
②趣味	65.0	68.4①
③サークルや部活動	59.4	37.8⑤
④大学の授業	52.8	56.1②
⑤学校行事やイベント	45.8	20.6⑧
⑥社会活動（ボランティア, NPO活動などを含む）	31.8	9.4⑩
⑦読書（マンガ，雑誌を除く）	31.7	40.2④
⑧大学の授業以外の自主的な勉強	17.5	34.1⑥
⑨卒業論文や卒業研究	13.6	17.1⑨
⑩就職活動	9.5	25.6⑦

参考）○で示した数字は順位

た．しかしこの割合はベネッセ調査全体と比べると1年生，3年生ともに低い．文教生の場合,「図書館や研究室などでの自習」の割合もベネッセ調査の結果に比べ少なく,授業と自習を合わせると，3年生では0.7，1年生では0.9割ほど文教生の数値が低くなる．その代わりに「友人との会話や交流など」と「大学構内でのサークル活動や部活動」が多く，特に「大学構内でのサークル活動や部活動」が多いという特徴がみられる．

表9では，大学で実際に過ごす時間，サークル・部活動の参加状況，またアルバイトの状況などを示したが，文教生は1年生，3年生ともに1週間のうち大学で過ごす時間がベネッセ調査全体と比べ半日ほど，時間では7から8時間ほど長い．また運動系のサークル・部活動に参加している割合がベネッセ調査と比べ40ポイント多く，参加率が非常に高いことがわかる．この結果は先に示した大学での時間の過ごし方を裏付けるものである.なお文科系サークル･部活の参加率にはベネッセ調査との違いがみられない．また，アルバイトを行っている者の割合も高く，1年生，3年生ともにおよそ20ポイント文教生が多くなっている．ここまでをまとめると，文教生の場合，大学で過ごす時間が他大学の学生に比べて長く，大学では勉強中心に生活してはいるが，他大学と比較すると部活動やサークル，友だちとの交流といった部分に多くの時間を割いている．それでは，もう少し詳細に，大学生活のどのような部分に力を入れて生活していると感じているのかについてみてみよう．

表10は，3年生に対象を絞り，これまでの大学生活の中でどこにどのくらい力を入れてきたか

について，10の項目をあげ，5段階で評価[3]したもののうち，「とても力を入れた」と「まあ力を入れた」の回答比率を足したものである．ここでも先にあげた文教生の特徴が見て取れる．ポイントをあげると，第一に文教生は，「アルバイト」，「サークルや部活動」，「学校行事やイベント」，「社会活動（ボランティア，NPO活動などを含む）」の4つの活動がベネッセ調査全体と比べて約20ポイント近く多く，いわゆる勉強以外の部分での活動が非常に活発である．順位でみると，「学校行事やイベント」がベネッセ調査では8位であるが文教生では5位に，「社会活動」はベネッセ調査では最下位の10であるが文教生では6位に来ている．「サークルや部活動」も大学の授業よりも上位である．第二に「大学の授業」は文教生もベネッセ調査も50％台で，半数以上の学生が力を入れていると答えたが，ベネッセ調査では2位であったのに対し，文教生は4位であった．第三に，「大学の勉強以外の自主的な勉強」はベネッセ調査と比較して17ポイント近く少なく，また「読書（マンガ，雑誌を除く）」「卒業論文や卒業研究」もベネッセ調査よりも少ない．

また，この10項目の「とても力を入れた」と「まあ力を入れた」の回答比率を全て足してみると，文教生は文教生3年生では399.5％，ベネッセ調査3年生は363.2％で1割ほど文教生の方が多い．表9で示したように文教生は大学にいる時間やサークル・部活の参加，アルバイトなどどれも数値が高く，全体として活発に活動している傾向にある．が，これも指摘したように，活動が活発なのは勉強以外の側面が強く，大学の授業は平均的であるが，大学の勉強以外の自主的勉強となると他大学の学生よりも劣る結果である．

大学への進学目的が資格の取得であり，その資格を用いて教員になりたいと明確に考えている特徴が文教生にはみられたが，大学での生活は資格取得に関わる「大学の授業」の相対的順位が低く，「大学の勉強以外の自主的な勉強」や「読書」が比較的少なかったことは，文教生が「教員の資格」ということをどのように捉えているのかについて，もう一歩踏み込んだ分析の必要性を示している．他方，教員になるための資格として求められるものは，知識の量や技術の有無だけではなく，良好な人間関係作りや高いコミュニケーショ能力，また多様な社会経験であると考えるならば，「アルバイト」や「学校行事やイベント」，「サークルや部活動」，さらに「社会活動」を活発に行うことは，いわゆる知識の習得では得られない能力を伸ばすことになり，これらの活動を比較的活発に行う文教生の特徴は大切にするべき特徴ということになる．この人間力と表現してよい力を有する学生には頼もしさを感じることになるが，反面，大学での学習や教育を，与えられた学習を効率的に行った結果の単位取得，あるいは目的達成のための手段として矮小化して捉えているのだとすれば，教育現場の将来の支える人間の教育観としては未成熟であると言わざるを得ない．果たしてどのように解釈するべきなのか，この点についてはもう少し考察を進めていく必要がある．

(2) 大学生活全般で身についたこと

①文教生の特徴

調査では，大学生活全体を通じてどの程度その事柄が身についたかについて28の項目をあげて質問している．この質問は，学年の影響を強く受けると考えられるため，基本的に3年生のデータを中心に分析していく．表11のそれぞれの項目に対して「かなり身についた」と「ある程度身についた」と答えた結果をそれぞれ合計したもので，文教生3年生で多かったものから順に並べている．

まず文教生3年生で身についた者の割合が高いものをあげると，「人と協力しながら物事を進める」で91.1％の学生がこの力を身につけたと考えている．その他80％以上のものを示すと，「社会の規範やルールにしたがって行動する」が84.6％，「進んで新しい知識・能力を身につけようとする」が82.2％，「現状を分析し，問題点や課題を発見する」が82.0％，「専門分野の基礎的

表11　大学生活で身につけたもの（「かなり身についた」+「ある程度身についた」）（%）

	文教3年	文教1年	ベネッセ全体3年	ベネッセ全体1年	文教3−文教1	ベ全3−ベ全1	文教3−ベ全3	文教1−ベ全1	すぐに使える知識（A）	理念や思考法（B）	（B）−（A）
人と協力しながら物事を進める（A2）	91.1	83.9	70.7	59.7	7.2	**11.0**	**20.4**	**24.2**	90.3	94.5	4.2
社会の規範やルールにしたがって行動する（A2）	84.6	82.0	75.4	69.3	2.6	6.1	9.2	12.7	81.9	92.6	10.7
進んで新しい知識・能力を身につけようとする（A2）	82.2	74.6	71.3	66.2	7.6	5.1	10.9	8.4	78.0	94.4	**16.4**
現状を分析し，問題点や課題を発見する（A1）	82.0	67.8	68.9	57.1	14.2	**11.8**	13.1	10.7	78.4	92.6	14.2
専門分野の基礎的な知識，技能を身に付ける（A3）	81.7	71.2	75.5	64.7	10.5	10.8	6.2	6.5	80.7	85.2	4.5
自分の適性や能力を把握する（A2）	81.1	73.6	63.2	57.5	7.5	5.7	**17.9**	**16.1**	81.0	83.4	2.4
異なる意見や立場を踏まえて，考えをまとめる（A2）	79.9	67.4	67.2	56.4	12.5	10.8	12.7	11.0	76.2	90.8	**14.6**
物事を批判的・多面的に考える（A1）	79.3	68.5	70.5	62.2	10.8	8.3	8.8	6.3	78.1	83.0	4.9
自分の感情を上手にコントロールする（A2）	78.9	78.5	67.7	61.8	0.4	5.9	11.2	**16.7**	78.7	79.6	0.9
自分の知識や考えを文章で論理的に書く（A1）	73.2	66.3	66.4	58.7	6.9	7.7	6.8	7.6	69.4	83.3	13.9
多様な情報から適切な情報を取捨選択する（A1）	71.0	59.8	74.4	61.3	11.2	**13.1**	−3.4	−1.5	66.4	83.3	**16.9**
社会や文化の多様性を理解し，尊重する	70.6	68.3	63.6	55.4	2.3	8.2	7.0	12.9	67.0	77.8	10.8
コンピュータを使って文章・発表資料を作成し表現する（B）	70.5	69.1	76.2	70.7	1.4	5.5	−5.7	−1.6	70.4	70.4	0.0
文献や資料にある情報を正しく理解する（A1）	70.1	58.6	73.3	59.7	11.5	**13.6**	−3.2	−1.1	65.2	83.3	**18.1**
幅広い教養・一般常識を身に付ける（A3）	68.7	70.2	69.5	65.8	−1.5	3.7	−0.8	4.4	66.5	76.0	9.5
既存の枠にとらわれず，新しい発想やアイデアを出す（A1）	68.2	47.7	47.7	44.8	**20.5**	2.9	**20.5**	2.9	69.7	64.8	−4.9
自ら先頭に立って行動し，グループをまとめる（D）	67.3	44.5	39.0	31.4	**22.8**	7.6	**28.3**	13.1	63.9	75.9	12.0
筋道を立てて論理的に問題を解決する（A1）	67.2	50.0	65.6	53.9	**17.2**	**11.7**	1.6	−3.9	60.7	83.0	**22.3**
自分で目標を設定し，計画的に行動する（A2）	66.6	59.2	61.3	53.4	7.4	7.9	5.3	5.8	63.8	76.0	12.2
自分に自信や肯定感をもつ（A2）	65.6	49.3	54.8	49.4	16.3	5.4	10.8	−0.1	62.8	72.2	9.4
社会活動に積極的に参加する（D）	55.1	29.2	20.9	19.0	**25.9**	1.9	**34.2**	10.2	54.9	55.5	0.6
コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする（B）	54.5	56.2	66.7	64.9	−1.7	1.8	−12.2	−8.7	54.2	56.6	2.4
自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する（B）	52.2	35.2	48.5	39.8	17.0	8.7	3.7	−4.6	47.7	62.3	**14.6**
仮説の検証や情報収集のために，実験や調査を適切に	45.8	26.8	49.6	39.8	**19.0**	9.8	−3.8	−13.0	42.0	55.6	13.6
計画・実施する（B）											
国際的な視野を身につける（C）	44.1	45.8	45.9	43.6	−1.7	2.3	−1.8	2.2	41.6	48.2	6.6
問題を解決するために，数式や図・グラフを利用する（B）	43.5	27.1	49.0	41.8	16.4	7.2	−5.5	**−14.7**	41.3	48.1	6.8
外国語で読み，書く（C）	21.1	33.1	35.9	46.4	−12.0	−10.5	−14.8	**−13.3**	18.1	29.6	11.5
外国語で聞き，話す（C）	18.3	30.6	31.2	41.1	−12.3	−9.9	−12.9	−10.5	14.3	27.8	13.5

A1：「研究方法・姿勢」　A2：「学習レディネス・姿勢」　A3：「知識の習得」　B：「数的処理」　C：「外国語」　D：「積極的態度」

な知識，技能を身に付ける」が 81.7%，「自分の適性や能力を把握する」が 81.1%であった．また身につけたと答えた者が少ない項目は，「外国語で聞き，話す」（18.3%），「外国語で読み，書く」（21.1%）であった．またベネッセ調査の同学年と比較して身についたと判断する者が多い項目は，3 年生では 28 項目中 18 項目，1 年生で 17 項目であり，文教生はベネッセ調査と比べて多くの力を身につけていると捉えているようである．

文教生 1 年生で上位のものをみると，3 年生と大きな違いはないことがわかる．また 3 年生と 1 年生の差に注目すると，3 年生の方が数値が高いものは 28 項目中 23 項目であった．特に差が大きかったものは（表 11 の「文教 3 年 - 文教 1 年」列を参照），「社会活動に積極的に参加する」で差が 25.9 ポイント，「自ら先頭にたって行動し，グループをまとめる」が 22.8 ポイント，「既存の枠にとらわれず，新しい発想やアイデアを出す」が 20.5 ポイント，「筋道を立てて論理的に問題を解決する」が 17.2 ポイントであった．逆に 3 年生の方が少なかったのは 5 項目で，「外国語で聞き，話す」で 12.3 ポイント，「外国語で読み，書く」で 12.0 ポイント，「コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする」で 1.7 ポイント，「国際的な視野を身につける」で 1.7 ポイント，「幅広い教養・一般常識を身に付ける」で 1.2 ポイント，それぞれ 3 年生の方が数値が少なかった．この 5 項目は学年が上がることで身についたと思う者が減っていると判断された項目であり，大学生活がこれらの力を身につけるように作用としていないと考えられる．

ところで，ベネッセ調査ではこの 28 項目を因子分析し 4 因子を抽出している．第 1 因子が「全般的能力」で 18 項目，第 2 因子が「数的処理」で 5 項目，第 3 因子が「外国語」で 3 項目，第 4 因子が「積極的態度」で 2 項目で構成されているが，第 1 因子が 18 項目と多かったため，本稿では，文教大調査のデータを用い第 1 因子の 18 項目をベネッセ調査と同じ手法（主因子法，Promax 回転）で因子分析を行った．その結果 3 因子が抽出され，それぞれの名称を「研究方法・姿勢」「学習レディネス・姿勢」「知識の習得」とした（「社会や文化の多様性を理解し，尊重する」は分類することができなかった）．その結果，28 項目を 6 つのグループに分類した．28 項目がそれぞれどのグループに分類されたかについては表 11 を見ていただきたい（表では「研究方法･姿勢」を A1，「学習レディネス・姿勢」を A2，「知識の習得」を A3，「数的処理」を B，「外国語」を C，「積極的態度」を D をとして示している）．

この分類をもとに，再度文教生の状況をみると，上位 10 項目中 6 項目が「学習レディネス・姿勢」であることがわかる．残りの 4 項目は，「研究方法・姿勢」が 3 項目，「知識の習得」が 1 項目であった．また下位の項目は「外国語」と「数的処理」で占められている．また 3 年生と 1 年生の差をもとに 6 つのグループの中でどの力に変化があったかを伸び率として算出した結果（3 年生と 1 年生の比率の差をグループごとに足しあげ，グループを構成する項目数で割り平均を出した），伸び率が大きかったのは「積極的態度」で「自ら先頭にたって行動」したり「社会活動に参加する」力が大学に入ってプラスに変化した割合が高い（平均で 23.3 ポイント変化）．次に多かったのは「研究方法・姿勢」（13.1 ポイント）で，マイナスに変化したのが「外国語」（8.6 ポイント），また全体に身についた者の割合が高かった「学習レディネス・姿勢」は大きな変化がみられず（7.7 ポイント），最も変化がみられなかったのは「知識の習得」（4.5 ポイント）であった．「学習レディネス・姿勢」については 1 年生の段階から数値が高く，このグループについては大学に入る以前に身につけていると考えるべきだろう．それに対して「積極的態度」は大学生になってから伸びた力である．また一般に大学教育の重要な目的である「知識の習得」について変化の割合が低いことは，問題であるというべきかもしれない．

②ベネッセ調査との比較

こうした文教生の状況と比較して，ベネッセ調査の状況はどうであろうか．表11でわかるように，ベネッセ調査の3年生では「かなり身についた」と「ある程度身についた」を足して80％を超えるものがなかった．上位の項目をみると「コンピュータを使って文章・発表資料を作成し表現する」(76.2％)，「専門分野の基礎的な知識，技能を身に付ける」(75.5％)，「社会の規範やルールにしたがって行動する」(75.4％)，「多様な情報から適切な情報を取捨選択する」(74.4％)，「文献や資料にある情報を正しく理解する」(73.3％)などであった．文教生で1位であった「人と協力しながら物事を進める」は7位であり，逆にベネッセ調査全体で1位だった「コンピュータを使って文章・発表資料を作成し表現する」は文教生では13位で順位がかなり下がる．上位10項目で文教生と共通するものは6項目であり，文教生と共通して「外国語」に関するものの数値が低い．

次にベネッセ調査の結果で，1年生と3年生の差が大きく3年生で増加したものは（表11の「ベ全3年−ベ全1年」列を参照)，「文献や資料にある情報を正しく理解する」で13.6ポイント，「多様な情報から適切な情報を取捨選択する」で13.1ポイント，「現状を分析し，問題点や課題を発見する」で11.8ポイント，「筋道を立てて論理的に問題を解決する」11.7ポイントそれそれ増加していた．また逆に3年生で減少したものは「外国語」に関連するであったが，ベネッセ調査で減少したものは2項目で，文教生の5項目に比べて少なかった．

また文教生と同様，28項目を6グループに分けて傾向をみると，ベネッセ調査3年生の上位10項目については，文教生では6項目あった「学習レディネス・姿勢」は3項目，最も多かったのは「研究方法・姿勢」が4項目で，「知識の獲得」が3項目，「数的処理」が1項目であった．文教生と比較すると多様な力がついている．また3年生で増加したものの多くは「研究方法・姿勢」である．

またそれぞれのグループの伸び率をみると，「研究方法・姿勢」が9.9ポイントで最も大きく，次が「知識の習得」であった．文教生で最も多かった「積極的態度」の伸び率は最も小さい．ただし伸び率が最も大きかった「研究方法・姿勢」も9.9ポイントで，文教生の伸び率が全体として大きいことがわかる．

次に，文教生とベネッセ調査との差が大きいものを3年生でみると（表11の「文教3年−ベ全3年」列を参照)，「社会活動に積極的に参加する」が34.2ポイント，「自ら先頭に立って行動し，グループをまとめる」が28.3％，「既存の枠にとらわれず，新しい発想やアイデアを出す」20.5ポイント，「人と協力しながら物事を進める」が20.4ポイント文教生の方が多い．逆に文教生の方が低いもので差が大きいものは，「外国語で読み，書く」の14.8ポイント，「外国語で聞き，話す」の12.9ポイント，「コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする」で12.2ポイント文教生の方が少なかった．

さて，これまでの結果を簡単にまとめると，まず，ベネッセ調査の対象者と比べ，文教生は生活時間の配分について，大学で勉強中心に生活してはいるが，他大学と比較すると部活動やサークル，友だちとの交流といった部分に比較的多くの時間を割いていることがわかった．また，「大学生生活において力を入れてきたこと」についても同様な結果が出た．

次に大学生活全般で身につけたことをたずねた結果では，28項目を6グループに分割した結果では，「学習レディネス・姿勢」グループが多くの学生から身についたと認識されており，大学に入ってから伸びた領域は「積極的姿勢」であった．一方，「外国語」と「数的処理」は割合が低く，「研究方法・姿勢」と「知識の習得」も相対的に身につけたと答える割合は多くなかった．

なお，文教生の回答について一つ指摘しておくと，大学で身についたと判断する者が全体として

多いということである．「かなり身についた」「ある程度身についた」と解答したものについて28項目全てを足してみると，文教3年生とベネッセ調整全体3年生との差は185.4ポイントであった．この点をどのように説明するかは一つの課題である．本来であれば事実として理解するべきであろうが，文字通り文教生は大学で多くのことを身に付けていると解釈するには数値が大き過ぎるように考えられる．さらに調査結果を分析して，この点については明らかにする必要がある．

4. 大学の教育目的と学生

(1) すぐに使える知識か，学問的な理念や思考法か

ベネッセ調査では，大学教育についての考えを学生に質問している．具体的には，大学教育に対する異なる考えをA，Bセットにしてあげ，どちらの考え方に近いかと質問している．例えば，「A：あまり興味がなくても，単位を楽に取れる授業がよい」と「B：単位を取るのが難しくても，自分の興味のある授業がよい」として二つの考えをあげ選択するというものである．ベネッセ調査では10のセットをあげているが，文教生調査では，ベネッセ調査の他に，「A：仕事についた後にすくに使えるような知識や技術を身につけられる授業がよい」と「B：仕事についた後では学びにくいような学問的な理念や思考法を身につけられる授業がよい」というセットの質問を加えた．以下ではこの質問について分析を行っていく．

結果をみる前に，この質問を付け加えた理由を述べておこう．この質問は大学で教える知識のあり方について問うたもので，Bの「仕事についた後では学びにくいような学問的な理念や思考法を身につけられる授業がよい」は，従来型の大学教育の目的を示しているのに対し，Aの「仕事についた後にすくに使えるような知識や技術を身につけられる授業がよい」は，現在の大学に求められるようになってきた教育や知識のあり方を示すものと考えている．大学が現在，どのような教育機関として位置づいているかについては，大学全入時代に入り明確とはいえない状況である．文部科学省は大学に対して出口管理を求める方向をとり始めたが（文部科学省中央審議会　2008），各大学は大学の入口と出口の調整をいかに行っていくかで不安定な環境の中にある．このような状況を前提として，学生は大学教育をどのように捉えているか，またどのような学生がどのような知識を大学に求め，大学に求める知識の違いは大学生活全般にどのような影響を与えるかを知る必要があると考えこの質問を加えた．

それでは，まずこの質問についての回答状況を示そう．表12にあるように，全体では「仕事についた後にすくに使えるような知識や技術を身につけられる授業がよい」が74.0％と多かった．学年での差は大きくないが，3年生でわずかに「すぐに使える知識」が増える．また卒業後の進路での違いをみると，教員を将来の進路と考えている者に「すぐに使える知識を教える授業がよい」と答えた者が多く，民間企業，公務員を志望する者と比べると10ポイント近く多い．また進学希望者の場合は半数弱の学生が「学問的な理念や思考法を身につけられる授業がよい」と答えていた．およそ9割の学生が教員を目指している中にあって，少数の学生が違ったスタンスで授業に臨んでいることがわかる．また表で示したように本学の受験の仕方でも違いが少しみられる．

全体でみた場合，7割以上の学生が「すぐに使える知識を教える授業がよい」と答えている．ベネッセ調査にはこの質問項目がないため，この7割という数値が文教生の特徴であるのかどうかは判断できないが，将来の進路が明確である文教生にとっては，具体的な仕事像がイメージできており，その仕事のための知識の重要性が強く意識されているのだろう．また，教育学部学校教育課程が教員免許状取得のための単位取得を前提としていることは，職業に必要な知識の獲得を求めることを後押ししているといえる．

表12　大学教育に求めるもの（%）

		すぐに使える知識	学問的理念・思考法
全　体		74.0	26.0
学　年	1年生	73.8	26.2
	3年生	74.3	25.7
卒業後の進路	教　員	75.2	24.8
	民間企業	66.7	33.3
	公務員	66.7	33.3
	進　学	55.6	44.4
入学方法	一般入試	72.0	28.0
	センター入試	80.0	20.0
	付属校推薦	67.9	32.1
	推　薦	79.3	20.7

さて次に，先に結果を示した，大学生活全体を通じて身についたことを28項目でたずねた質問結果との関係をみてみよう．少し戻るが，表11の右側3列に大学教育の質問との関係の結果を示した．まず表の数値の読み方について説明すると，対象者は文教生3年生で，大学教育について「仕事についた後にすくに使えるような知識や技術を身につけられる授業がよい」と「仕事についた後では学びにくいような学問的な理念や思考法を身につけられる授業がよい」を独立変数として，それぞれの回答者が28項目について「かなり身についた」と「ある程度身についた」と答えた比率を足した数値を載せた．

それでは結果をみてみよう．表をみてまずわかることは，「かなり身についた」と「ある程度身についた」の合計は，「既存の枠にとらわれず，新しい発想やアイデアを出す」以外の27項目で，「仕事についた後では学びにくいような学問的な理念や思考法を身につられる授業がよい」と答えた学生の方が多くなっている．差が大きいものは「筋道を立てて論理的に問題を解決する（22.3ポイント）」，「文献や資料にある情報を正しく理解する（18.1ポイント）」，「多様な情報から適切な情報を取捨選択する（16.9ポイント）」，「進んで新しい知識・能力を身につけようとする（16.4ポイント）」であった．また差が大きかったものは，「研究姿勢・方法」に関するものが多く，大学教育に対して学問的な理念や思考法を身につけることを求める学生の方が，大学生活で多くのことを身につけたと考えており，研究する姿勢がより強く見てとれる．

さらに．大学教育と大学生活で身につけたこと28項目のクロス集計のカイ二乗検定を行った．危険率5%以下で有意な差があったのは，「物事を批判的・多面的に考える」「筋道を立てて論理的に問題を解決する」，「文献や資料にある情報を正しく理解する」の3つの質問であった．危険率を10%に拡大すると「進んで新しい知識・能力を身につけようとする」，「多様な情報から適切な情報を取捨選択する」，「外国語で聞き，話す」，「現状を分析し，問題点や課題を発見する」の4項目がプラスされた．これらの7項目が，先の因子分析の結果によって分類したグループのどこに入るかをみると，「外国語で聞き，話す」以外は全て「研究姿勢・方法」に入っていた．

以上の結果から，文教生3年生は，大学教育について，4分の3の学生が「仕事についた後にすくに使えるような知識や技術を身につけられる授業がよい」と答えていて，実践的，即戦力につながる知識を求めていることがわかった．また教員を目指す学生にこの傾向が強かった．一方，大学生活で身につけたこと28項目との関係をみると，

「仕事についた後では学びにくいような学問的な理念や思考法を身につけられる授業がよい」と答えた学生の方が，ほとんどの項目で身につけたと答える割合が高かったことは，大学教育に期待する知識の種類の相違が大学生活全般に影響を与える可能性を示している．全体として文教生は「学問的理念や思考法」を選択する者が少なかったが，この点を中心に，学生の大学での学習に対する意識のあり方についてさらに探る必要がある．

(2) 高校でもっと学んでおきたかった科目からの疑問

調査では「大学に入って，高校の時にもっと勉強しておけばよかったと思う教科はありますか」と，高校で学ぶ14教科[4]あげ，複数回答の形で質問している．詳しいデータを紹介する余裕はないが，多くの学生に選択された上位3科目は，ベネッセ調査では，英語（61.8%），数学（34.1%），世界史（18.5%）であったのに対し，文教調査では英語（65.6%），数学（36.4%），日本史（36.0%）であった．また14教科それぞれについて，もっと勉強しておけばよかったと選択した者の割合の合計を比較してみると，ベネッセ調査全体では234.1%，ベネッセ調査教育系で270.8%であったのに対し，文教調査では全体で338.4%であり，全体とで比較すると100ポイント近く，また教育系との比較でも70ポイント近く多かった．また文教調査で3年生と1年生を比較すると，3年生が399.1%，1年生が293.1%で3年生になって100ポイント近く増えている．ベネッセ調査では3年生になっての増加が21.6ポイントであることからすると，文教生の場合，学年が上がることによる数値の上昇には顕著なものがある．高校での勉強の重要性は，大学の勉強を進めていく上で知識不足を実感した際に自覚するものとまずは考えられるが，文教生の場合は，教員になるという進路との関係でこの質問に対する回答比率が高かったと予想できる．特に全教科を教える小学校教員を目指す中で，多くの科目が選択されたと考えられる．

しかしこの数値をみて一つ疑問がわく．疑問は，高校でもっと勉強しておけばよかったと思っているのに，それではなぜ勉強しないのだろう，という単純な疑問である．ベネッセ調査と比較して100ポイントも高い自覚があるにもかかわらず，先に確認したようにいわゆる勉強に対して決して積極的ではないことは，注視する必要がある．また，教員としてこれから社会に出るという意識が強いのであれば，もっと学んでおけばよかったという思いは，将来への不安や自信のなさにつながる．しかし，文教生の場合，「自分に自信や肯定感をもつ」は3年生になって伸びており，伸び率は上位5位に入っている．これから教員になろうとする者がもっと学べばよかったという思うことは当然のことだともいえるが，その思いは表面的なものと映る．この点に，文教生の一面を見て取ることができるのではないだろうか．

5. 文教生の強さと弱さ

以上の調査結果の分析から，文教大学教育学部学校教育課程にはベネッセ調査の対象学生と比較して，いくつか記すべき特徴があることがわかった．特徴をあげてみよう．

まず第一に，文教生は教員になるという目的を明確にもって大学に入学してきており，目的の明確さはベネッセ調査の学生と比較して際立っていた．また入学後も目的の達成に向けて早い段階から準備を始めている．第二に，大学での生活はベネッセ調査の結果と比較して，「アルバイト」，「サークルや部活動」，「学校行事やイベント」，「社会活動（ボランティア，NPO活動などを含む）」の4つの活動が活発であり，相対的に「大学の授業」，「大学の勉強以外の自主的な勉強」や「読書」が低い状況であった．第三に，大学生活全体で身についたと考えるものは，ベネッセ調査と比較して多かった．また「学習レディネス・姿勢」名づけた領域の項目を身につけたと考える学生が多く，大学入学後に伸び率が大きかったものは「積

極的態度」の領域であった．第四に，大学生活の様子や大学生活で身についたものの結果から総合的に判断して，大学でのいわゆる勉強は相対的に重要とは考えられていない傾向がみられた．

以上の特徴について考えてみよう．現在の子どもたちが学ぶ動機をもつことが難しくなっていることが指摘され，その改善が課題となっている中，文教生が学ぶ目的を強って大学進学にしてきていることは，高く評価するべきであろう．このような特徴が生まれた背景には，冒頭に述べたように，本学教育学部が学部の特徴を明確にもち，その特徴を実現させているということが高校生に伝わっていることによる点が大きい．その意味では，大学が明確な特徴を描き出すことは，学習動機が明確な学生を集めることに有効であるということになる．

また，文部科学省は現在の教員の資質能力の問題の一つとして「実践的指導力やコミュニケーション力，チームで対応する力などの教員としての基礎的な力が十分に身に付いていないことなどが指摘されており，今後，こうした力が不足した教員が大量に採用されるおそれがある」（文部科学省中央審議会教員の資質能力向上特別部会 2011: 1）ということをあげているが，今回の調査結果をみる限り，文教生にはここで指摘されているコミュニケーション力やチームで対応する力は予想以上に身についているし，多様な活動を行っていることから，こうした能力を身につけることに積極的であることがわかった．この点も文教生の特徴の中で高く評価するべきことだといってよい．また，なぜこれらの特徴を文教生は手に入れることができているのか，なぜ多様な活動を行うのか，といった点について，今後さらに探っていく必要がある．

ただ文教生には弱さもある．それは文教生にとっての勉強することの相対的な位置の低さである．調査では，卒業後の進路に向けての準備が早くから進められていることがわかったが，その準備はいわゆる勉強という形では明確に出てこない．また，本来，あるいは従来の大学が提供してきた，学問への志向や問題を分析する力としての知識の習得，あるいはそうした知識の重要性が，他の大学の学生と比較して文教生には強く認識されていないことがわかった．また全体として，すぐに役立つ知識を重視する意識や，手段的な意味で勉強を捉える様子が見て取れた．大学文化と高校文化は違うもののはずであるが，文教生は高校までの学校文化から大学文化への移動できていないように思われる．教員になるという進路がこの移動を妨げている可能性もある．

この弱さの側面は，強さによって帳消しにされるものではないと考えるべきだろう．なぜなら，この弱さは，文教生の強さ，つまり学習目的の明確さがもたらしと考えることができるからである．目的の明確さが，必要な事柄，学習の結果が予想される事柄を学ぶことを学習と捉えることにつながっている可能性はないだろうか．この点は調査結果を分析する中でもみえてきたことである．では，なぜ必要な事柄を学ぶこととして学習を捉えるのではいけないか，また学習の意味を広げるために大学は何を教えるべきなのだろうか．この点についてはすで別に述べているところなのでそちらを参照していただきたいが（千葉 2009），ここではもう一つ理由をあげておこう．

若者の行動や意識を分析している社会学者の古市憲寿は，現在の若者が生きる社会を次のように平易な言葉で語っている．

> しかし，今やメリトクラシーは壊れかかっている．なぜか．まず『いい学校』に入ったからといって『いい会社』に入れる訳ではなくなったら．今時，いくら東大出身でもマークシート型の問題が得意なだけでは話にならない．企業は学生に「人間力」や「コミュニケーション能力」を要求してくる．
>
> そして，二つ目の理由が，「いい会社」に入ったとしてもそれが「いい人生」を保証するものかみんなが疑うようになってきたか

ら．何が「いい会社」か，何が「いい人生」がわからない時代．「いい大学」だけは偏差値で辛うじてわかるけれど，それが「いい会社」や「いい人生」に直結しているようにはとても思えない．（古市　2010：10）

文教生が直接相手にする社会とは異なるが，企業社会に出ていこうとする同年代の若者は，古市のいう「人間力」や「コミュニケーション能力」を身につけなければいけないことを就職活動を通して発見するだけでなく，どこかで「いい人生」についても考えなければいけないとことを身にしみて感じている．なぜ現代の若者がこのようなことを考えなければいけなくなったのかについて，ここで触れる余裕はないが，このわからないことを考えなければいけない時代に入ったことは，古市の指摘を待つまでもなく，現代社会を覆う気分として現在の社会を生きる我々にすでに共有されている．現在の大学生の多くは，「わからない」社会を言葉としてではなく，現実として感じざるを得ない状況にある．では文教生はどうなのだろうか．教員なることを目指す文教生は，この形容詞を自分の問題として肌で感じることができないとしても，これからの社会を生きる子どもたちに教える者として対面する以上，少なくとも頭で理解しておく必要はあるだろう．しかし，目標を明確なものとして設定し，その目標達成方法も明確なものとして大学生活を送る中では，「わからないこと」を追求することの価値や重要性はなかなか理解できないことになっているかもしれない．

このように考えると，文教生は弱さを克服することを意識的に行っていかなければならないだろう．大学生活で身につけるものとして大学文化には，この「わからないこと」を追求することの重要性とその方法の伝達が含まれており，それは4年生大学への進学率が50％を超え，我が国の高等教育がトロウのいうユニバーサル段階に入った現在においても変わらないことである．

大学が大きく変化する時代に入り，明確な目的や目に見える学習成果が求められようになり，大学文化は変容せざるを得ない状況である．一方で社会は「わからないこと」へ向かう力を求めており，大学文化の変容を許さない面ももっている．いずれも社会が要請する事柄であり，この二つの要請がもたらす困難さの中で日々の教育活動は続いているが，この教育活動を再生産する教員，また教員になろうとしている者に，まず，「わからないこと」へ向かう力が必要である．明確な目的や目に見える学習成果を強調することで生まれる大学のジレンマを．今回の調査データは示してくれたが，この点に現実場面でどう向き合っていくかが次の課題であろう．

なお，調査したにもかかわらず本稿では扱いきれなかった調査項目がまだ残っており，また今回は単純な手法による分析しかできなかったことなどから，この調査のデータの分析をさらに行っていく必要がある．分析を進めることで，生じた疑問の解答の鍵を見出していきたい．

【註】

1）この調査は，2009年度，2010年度の教育学部共同研究費を用いて本学教育学部所属の中本敬子と行った研究の一部である．

2）Benesse教育研究開発センターによる『大学生の学習・生活実態調査　2008年調査』は，18～24歳の大学1～4年生を対象に行ったものである．約80万人のモニター母集団より上記属性に該当する者のうち，文部科学省の『平成20年度学校基本調査（速報）』の男女比・学部系統別の比率を参考に，無作為に対象を抽出しアンケートへの協力を依頼し，大学1年生1,017名，2年生1,013名，3年生1.017名，4年生1.023名となった時点で調査を終了したもので，インターネット調査の方法によっている．有効回答数は4,070名で，男子2,439名，女子1,631名から回答を得ている．回答者のその他の属性については，在籍大学の設置者は「国立」25.4％，「公立」6.2％，「私立」68.4％，学部系統は「人文科学」20.6％，「社会科学」36.2％，「理工」24.1％，「農水産」3.1％，「保健その他」7.0％，「教育」3.5％，「その他」3.7％，大学所在地は「関東」48.6％，「近畿」19.8％，「中部」11.6％，「九州・沖縄」6.8％，「中国・四国」5.3％，「東北」4.2％，「北海道」3.7％，大学の入試難易度

は進研模試の入試難易度ランキングの偏差値より「65以上」21.1%，「60以上65未満」13.2%，「55以上60未満」15.4%，「50以上55未満」18.5%，「45以上50未満」12.7%，「45未満」19.1%である．

3）5段階の評価は「とても力を入れた」「まあ力を入れた」「少し力を入れた」「あまり力を入れなかった」「全く力を入れなかった」で，「大学の授業」以外の項目には「大学生活ではやっていない」の選択肢が用意され，6つから選ぶことになっている．

4）14教科は，英語，英語以外の外国語，数学，国語，物理，化学，生物，地学，世界史，日本史，地理，政治・経済，倫理，現代社会である．

【引用・参考文献】

朝日新聞社版教育・ジュニア編集部内「大学」編集室 2011，『2012年版大学ランキング』朝日新聞社.

Benesse　教育研究開発センター，2009，『研究所報 VOL. 51　大学生の学習・生活実態調査報告書』.

千葉聡子，2009，「大学の変化と教養教育の役割―初年次教育の広がりの次に大学が目指すものについての一考察」文教大学教育学部紀要第43集　121-30

古市憲寿，2010，『希望難民ご一行様―ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社.

文部科学省中央審議会，2008，『学士教育課程の構築に向けて（答申）』.

文部科学省中央審議会教員の資質能力向上特別部会，2011，『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）』.